



2112年、SAPPORO地区。かつての札幌市。
その一角に立っている廃墟となった劇場。

劇場には客席などが放置されたまま。床には照明の灯体、スピーカー、何かの芝居で使われた舞台セット、小道具類、台本、チラシなどが散らばっている。まるで全てが「冷凍保存」されたような感じでそこに居る。

観客は、原則として劇場の搬入口・楽屋口から劇場に入り、舞台上を横切つて客席に着く。

プロローグ 8月某日

真つ暗闇の中、誰かの咳がかすかに聞こえてくる。



エレキ

……急に消えましたね。

隅田

そうですね……どっか触りました？

エレキ

いえ、どこも。

隅田

何も見えないんですけど。

隅田

そうですね。

エレキ

懐中電灯かなんか持っていないですか？

隅田

今はちよっと、持ち合わせてないですね。

エレキ

……参ったな。

隅田

……とりあえず、目が慣れるまで待つしかないですね。

エレキ

じゃあ、ひとまず動かないでいきましょうか。

沈黙。

誰かの咳が響く。と、別の人の咳が響く。互いの咳が響きあう。

隅田

……目、慣れませんか。

エレキ

……全く。全然。

隅田

窓も何もないからな……。

エレキ

劇場、ですからね。

突然、ガタツという音がして、続いてさらに何かが倒れたような音。

青木

叫び声「イヤー！」

隅田

え？

エレキ

どうしました？

青木

半泣きですいません、何かにつまづいて転びました。

エレキ

なんで動くの！

青木

……怖くって。

エレキ

いや、怖いんだったら動かないで下さい。

青木

無理です。

ココく、

エレキ 動かないでって言いましたよね？
青木 無理です。
エレキ 何が無理なんですか。
青木 あの、起こしてもらえますか？
エレキ 自分で起きて下さいよ。
青木 なんか、足くじいちゃったみたいで……グキッて……。
エレキ 起こしてください。
青木 ……。
エレキ ねえ、
青木 どこにいますか？
隅田 あ、こっちです。
青木 今、行きますんで。
隅田 すいません。

隅田、青木に向かって静かに向かっている様子。

青木 叫び声) あー！
隅田 びっくりしたあ！
青木 ちよっと、そこお尻です。
隅田 あ、すいません。思い切り掴んじやいました。手を伸ばしてください。
青木 あ、はい。って、ちよっと！
隅田 え？
青木 だから、そこはお尻ですって。
隅田 おかしいな……。
青木 おかしいじゃなくて。
隅田 固くないですか？
青木 ……はい？
隅田 あの、あなたのお尻、固くないですか？
青木 ……何言ってるんですか？
隅田 ……だ……って……。
隅田 ……あの、何の話ですか？
青木 ……ですから、尻が固いんですよ。
隅田 青木の尻がですか？
隅田 はい。
隅田 何言ってるんですか！
隅田 ご存知でした？
隅田 いえ。そんなに固いんですか？
隅田 ……す……ごい……ですよ。
隅田 ……青木、どこだ？
隅田 来ないでいいから！
隅田 ちよっと確認したいことがある！
隅田 未確認でいいから！
隅田 小林さん、こっちです！
隅田 呼ぶな！
隅田 うわ、固い！
隅田 ちよっと！
隅田 凄く固い！ バリ固い！ お前の尻、何で出来てるんだ！ 人間か？
隅田 人間ですよ！
隅田 固い通り越して痛い！
隅田 痛い？

明かりが点く。

隅田 あ、点いた。
エレキ あ。

床に倒れこんでいる青木、その脇にたたずむ隅田、そして少し離れたところで照明の灯体をがっちり掴んでいるエレキの姿があらわになる。

なお3名とも、かなり着込んでいる。

エレキ
隅田
エレキ
青木

……。
それ、照明です。
……。うん。
……起こしてもらえますか？

隅田、青木の手を取り、助け起こす。青木、足首を痛めた様子。

エレキ
青木
隅田
エレキ

……。触られてないのに何騒いでんだよ、お前は！
違いますよ、この人は本当に触ったんですよ。
そして本当に固かったんですよ。
もういいよ……。

エレキは二人から離れ、劇場の中を見て回る。

隅田
青木
隅田
青木
エレキ
隅田
エレキ

……。言われませんか？ お尻固いつて。
……。言われますけど。
やっはり！
静かにして！
……。とても昔の建物とは思えないな。ホコリはひどいけど。それくらいだ。
ずっと冷凍されてたようなもんですからね。
確かに。

エレキ、床に落ちていたチラシを一枚拾って見つめる。

エレキ
青木
エレキ
青木
エレキ

「2020年9月」……。92年前だ。
何ですか、それ。
チラシだな。
チラシ？
このあたりに落ちてるの全部そうじゃないか？

隅田もチラシを拾う。

青木
エレキ
隅田

ここなら腐らないですもんね。
ここならな。
これって、何のチラシですか？

山崎が現れる。山崎はそれほど着込んでいない。

山崎
隅田
山崎
隅田
山崎
青木
山崎
青木
山崎
エレキ
山崎
隅田
エレキ
山崎
青木

あの、すいません、大丈夫でしたか？
ん？
ごめんなさい、今電気消しちゃったの、多分俺です。
え、ザキさんですか？
なんか変なところ触っちゃったみたいで。本当にごめんなさい。大丈夫でした？
青木さんが転んで足をくじきました。
え、本当ですか
いや、大丈夫です、少しなんです。
すいません、事務所に行ったら包帯とか湿布とかあるんで。
あ、じゃあ後で。
本当にすいませんでした。
いや、こちらこそ無理言っすいません。
え？
色々、準備までしてもらって。
いいんですよ、暇ですから。久々のお客さんだし。
ですね、わざわざ東京から。
いえ。
ここまでだって大変だったでしょう。
そうですね、まあ。

でしよう。

……あの、山崎さん。

はい。

それ、寒くないんですか？

はい？

その格好。

寒くないですよ？

本当ですか？

ちよっどいいっていうか、ちよっど暑いくらいです。ああ、小林さんは東京から来たから寒く感じるんでしょうけど。今日は暖かい方ですよ。

暖かいほうなんですか？

ええ、まあ。

8月ですしね。

8月ですけど。

夏ですから。

にしても、薄着すぎですよ。

お前が厚着なんだよ。いい加減、慣れるよ。

慣れませんか？

……夏に氷点下か。

あれ、SAPPOROは夏でも氷点下だって知らなかったんですか？

いや、知ってます。知ってましたけど……。やっぱり実際に来てみると、想像を遥かに超

えた寒さでした。

ま、慣れですよ。

無理ですよ。

山崎さんはどれくらい復興局で働いてらっしゃるんですか？

僕はもうすぐ10年ですね。

10年ですか。

僕は2年です。

お前には聞いてないから。

いいじゃないすか。

何人くらいいらっしゃるんですしたっけ？

大体……500名くらいだったかな？ あ、これも取材ですか？

え、いえ、別に。まだカメラも無いんで。

そうか、そうですね。隅田に そうだよ。

何も言ってもせんよ。

痛っ。

え？ あ、足ですか？

はい。

重ね重ね、申し訳ないです。

ひとまず、事務所に戻って手当しましょうか。

すいません、お願いします。

じゃあ、行きましょう。

大丈夫です。俺が連れていきます。

お、何？ 美人だからっていいところ見せようとして。

違いますよ。美人じゃないですよ。

え？

あ、違います！ 間違えました。美人じゃないわけじゃないです。……っていう言い方も違うか！ じゃあ美人かどうかは一旦、置いときましょう。いや、置いといてもまずいのか

……。だから、あれです、

何しどろもどろになっただよ。

もう、何でもいいですから……。

良くなさそうじゃないすか。

美人じゃなくて、尻も固かったら最悪でしょう。

そんな事は無いです！

足以外もくじいちゃった感じかな？

なんでそんなに上から目線で言っちゃってんですか！

いいから連れて行きなさいよ。

エレキは、何かの台本を拾う。パラパラとめくって。

ココく、

エレキ ……台本か。
山崎 ん？

台本が、落ちてました。多分、さっきのチラシの奴。

エレキが台本を掲げ、他の三人に寄っていく。
すると突然、電気が落ちて、再び暗闇に包まれる。

山崎 あれ……？

間。

エレキ ……またか。
隅田 ザキさん……。
山崎 いや、今度は俺じゃないよ。ここにいたんだから。
隅田 ちゃんと直してきたんですか？
山崎 直したけど……やっばりどこか故障してるのか？
隅田 ……築100年ですから。正直、電気がついたのが奇跡かもしれませんけど。
エレキ ……あ。青木、今度は動くなよ。
青木 ……足くじいてるから、動きたくても動けないですよ。

沈黙。

誰かが咳をする。それにつられてまた誰かが咳をする。四人の咳が響く。

青木 悲鳴) イヤー！

青木さん

……ごめん、どうしても気になってて。

ふざけんな！

小林さん！

確かに、固いな……。

……ですよね？

うるさい！ あ！

またガタンと大きな音。

青木 また転んだ……。

隅田 どうでしょう？

目が慣れるまで……慣れないもんな。

……また電気がつくかもしれないから、とりあえず待つしかないですね。

間。

青木 ……床、すごい冷たいです。

もうちよっと我慢しろ。

いつまでですか。

……分かりません。

我慢出来ない……。

だから、動くなって。

……。このまま電気つかなかったらどうするんですか？

……どうしましょう。

……。さあ。

青木

隅田

エレキ

青木

隅田

再び沈黙。

そして咳の連鎖がまた起こり、四人の咳が響きあう。いや、違う人間の咳も混じっている、ような。

山崎

エレキ

……あの、
はい？

ココく、

音効

(ヘッドホンを差し出し) 聞いてみます？

能登、ヘッドホンを被り、音を聞く。

能登

「むした」って言ってる。櫻井に「まずくないですか？ 大丈夫ですか？ 撮り直しますか？ 問題無いです。大丈夫です。」

能登

えー？

能登

多分、カットしますから。

能登

そうですか……。

能登

あ、その囁んじやった部分だけですよ？

能登

え、「むした」の部分だけカットってことですか？

「どうもありがとうございます」で切るっ

能登

てことですか？

脇田

いやいや、そんなわけないでしょう (笑)

櫻井

昔の人みたいになっちゃいますから。ありがとうございます「ぎー」って。

櫻井

あ、そうか。

能登

能登さんて天然ですか？

脇田

違いますよ。脇田を指して「天然はこちらですよ。」

能登

なんで。違うよ。

能登

だってさ、

櫻井

じゃあ、ちよっと休憩して、その後、曾我さんお願いします。

曾我

分かりました。

櫻井

じゃ、休憩します。

みんな休憩する。職員たちは水筒からお茶を出して配る。

能登

お茶をもらい「すいません、頂きます。お茶を飲み」あー、温かい。

櫻井

いやあ、やっぱり緊張しますねえ。

脇田

してました？

能登

してました。ガチガチでしたよ。

脇田

なんか、カメラがそこにあると変に意識しちゃって。

能登

何も意識する必要ないでしょ。

脇田

そうだけどさ。というか、お前の方がひどかったよ、さつき。

能登

何が？ 私は緊張してないし。

脇田

してたって。

能登

してないって。

曾我

曾我に「してたよね？」

脇田

緊張なのかどうか分からないけど、鼻息が荒かったです。

能登

嘘。

曾我

途中ですごいスピースピー言ってたから。

能登

言ってた (笑)。真似して「そうですねスピー、どうしてもスピー、この先本当にどうなるかっていうのはスピー、スピー、スピー……不安でスピー。」

脇田

そんなこと言っていないって！

曾我

不安でスピー」って (笑)

能登

まあ、そこは嘘だけどさ (笑)。でも、鼻息は本当だから。

曾我

結構、必死で笑い堪えてたから。

脇田

櫻井に「……鳴ってました？」

櫻井

あー……音効に「どうだった？」

音効

……鳴ってました。

脇田

マジで！

音効

いや、でも、多分そこは上手く調整できると思うんで。

脇田

お願いしますね！

音効

頑張ります。

脇田

お願いしますね！

音効

はい……。

能登

さあ、曾我は何やらかすかな。

曾我

私はやらかしませんよ。

能登

さて、どうかな？

曾我

落ち着いて話しますから。

カメラマン

以下、カメラ) あの、櫻井さん、

脇田 山崎

うちの局長も無茶言うんですよ。実際死にそうになりましたから。それで死人が出てたら大問題ですよ。

山崎と岡が現れる。

山崎 山崎

おーい。

山崎 山崎

暖房の調子どう？

脇田 山崎

暖房？

岡 能登

床暖です。5分くらい前にスイッチ入れたんですけど。

脇田 山崎

床に手をつけて、冷たいままだけ。

山崎 山崎

特に変わらないですけど。

岡 山崎

ほんとにー？

山崎 山崎

だから山崎さん、さっきのじゃないですって。

岡 山崎

えー、絶対そうだと思っただけだなー。じゃあ、あっちの黄色い線かなー？

山崎 山崎

だから言ったじゃないですか。

山崎 山崎

すいません、御苦労かけましてー。

山崎 山崎

あ、いーえー。

能登 山崎

俺、見てみましようか？

山崎 山崎

いいよいいよ、大丈夫。

脇田 山崎

そういって2週間経ちますけど。

山崎 山崎

……じゃあ、お前らちょっと見てみるよ。

山崎 山崎

なんすか。

能登 山崎

直せるもんなら直してみるよ。

脇田 山崎

けんか腰にならないで下さいよ。

脇田 山崎

行ってきまーす。

能登と脇田、山崎は暖房装置を見に行く。

曾我 山崎

……山崎さんで、機械直すの好きだけど、ほとんど中途半端に終わりますよね。正直、そろそろ直してほしいなー。

岡 山崎

撮影、終わったんですか？

山崎 山崎

あ、いえ、今日はあと、曾我さんの分が残ってます。

岡 山崎

そうですか。私、明日ですよ。

山崎 山崎

えーと、そうですね。

岡 山崎

どんなこと聞くんですか？

山崎 山崎

まあ……お仕事のこととか、SAPPROのこととか、いろいろ。

山崎 山崎

へー。で、みんな何で答えてるんですか？

山崎 山崎

んーと、そこは内緒で。

山崎 山崎

そうなんだ。

岡 山崎

出来るだけ自然な感じで聞きたいんで。あまり身構えられても困るんで。

曾我 山崎

さっきの二人は緊張してましたけど。

山崎 山崎

緊張はすると思うんですけど、言うことが不自然じゃなければ。

曾我 山崎

ああ、そうか。

岡 山崎

なんでここで撮影することにしたんですか？

山崎 山崎

それは、ディレクターがここがいいって言うんで。

岡 山崎

へー。気に入ったって言うか……ディレクターのひいじいさんが昔の札幌で演劇をやったらしい。

曾我 山崎

ひいおじいさんが。

山崎 山崎

それで、この劇場のことも知ってたらしいですよ。

曾我 山崎

そうなんですか。

岡 山崎

へー。それでここで撮影を。

山崎 山崎

みたいです。

岡 山崎

ふーん。

山崎 山崎

それに付き合わされてるわけですよ、うちらは。

曾我 山崎

……でも、テレビクルーのみなさんで、元々は札幌出身なんですよね？

山崎 山崎

先祖がって話ですよ？ だって、僕らって今のこういう凍りついたSAPPROしか知らないわけじゃないですか。

曾我 山崎

……でも、テレビクルーのみなさんで、元々は札幌出身なんですよね？

山崎 山崎

先祖がって話ですよ？ だって、僕らって今のこういう凍りついたSAPPROしか知らないわけじゃないですか。

曾我 岡 櫻井 曾我

まあ。
確かにここに200万人も住んでたなんてちよつと信じられませんよね。
いやあ、本当に。
ていうことは昔はこの劇場も、たくさんの人で賑わってたんですね。

三人、客席を見渡す。

岡

……どうなんだろうねえ。

曾我、客席に座る。

曾我

こんな感じかあ。

え、何が？

岡

いや、こんな感じで演劇を見たりしてたんだなあと思つて。……二人で何かやってみてよえ？

櫻井

僕らがですか？

曾我

何か。

櫻井

いや、無理無理無理無理。

岡

何かつて言われても。

櫻井

ねえ。

曾我

漫才とか。

岡

演劇じゃないし。

曾我

……あー、でも、そこに立つてこっちから見ると、役者さんつて感じるわ。

櫻井

あ、そうですか？

曾我

何その気になつてるんですか。

櫻井

よ！ 櫻井屋！

曾我

それ歌舞伎ですから。
演劇つてそういうんじゃないんですか？

曾我

いや、違いますよ。

櫻井

よく知らなくて。

曾我

えーと……まあ、僕もよく知らないんですけど。うちのカメラマンが詳しいんで、あいつ戻ったら聞いてみてください。

櫻井

詳しいんですか。

岡

あいつ、この仕事する前は東京で役者を目指してて。才能なくて辞めたらしいですけど。

曾我

へえ。パツとしないですもんね。

岡

岡ちゃん、言い過ぎだから。

曾我

ごめんなさい。つい。

岡

櫻井に、すいません。

櫻井

別に謝らなくても。俺のことじゃないし。俺がパツとしないつて言うんだつたら謝つて欲しいですけど。

曾我

櫻井さんもパツとしませんよ。

岡

はい、謝つて。

櫻井

ごめんなさい。

曾我

拍手して。おもしろーい。

岡

漫才じゃないから！

櫻井

でも、東京いいですよね。

岡

なんの話ですか、今度は。

櫻井

私、東京行きたいんですよ。いろいろ楽しそうだし。

岡

いつの時代の話ですか。笑。東京もダメですよ。

櫻井

でも、ここよりは色々あるでしょう。

岡

……そりゃまあ……雪と氷しか無いですから。

曾我

東京行きたいんですよねえ……。

岡

ずつと言つてるね、それ。

曾我

……。

岡

じゃあ、そのためにも、まずはSAPPOROの復興ですか！

櫻井

いや、無理ですよ。

岡

え？

櫻井

ここがかつてのように大勢の人が住める土地に戻るなんて、誰も思つてませんから。百年

前の札幌を知ってる人なんて、もうほとんど生きてませんし。

岡

……。

櫻井

……。

曾我

……。

岡

……。

櫻井

……。

曾我

……。